文化遺産保存公開日誌抄

平成23年4月1日~平成24年3月31日

平成23年

- 4. 11 資料受領 (平須賀)
- 4. 15 資料受領(神扇)
- 4. 19 市指定文化財 (円空仏) 展示会出品関係打合せ (千塚)
- 5. 2 民具資料館見学(一般・市内)
- 5. 11 埋蔵文化財試掘調査(松石字東)
- 5. 13 東日本大震災文化財ドクター派遣事業岸本家住宅調査立会 東部地区文化財担当者会監查(春日部市庄和支所)
- 民具資料館除草
- 5.17 市内文化財案内(高松市ワンダーフォーゲル協会)
- 5. 20 民具資料館見学(さくら小学校)
- 5. 26 歷史的公文書収集
- 東部地区文化財担当者会総会(杉戸町役場)
- 5. 27 歷史的公文書収集
- 東日本大震災に伴う資料室復旧作業 歴史的公文書収集
- 5.30 5. 31 歷中的公文書収集
- 東日本大震災に伴う資料室復旧作業
- 埼史協総会・記念講演会 (川越市立博物館)
- 6.13 民具資料館の清掃・除草
- 6. 14 民具資料館視察対応(市議会文教厚生常任理事会所管事務調査)
- 6.17 歴史的公文書収集
- 6. 20 歴史的公文書収集
- 6.22 東日本大震災に伴う資料室整理
- 6. 24 東部地区文化財担当者会例会(八潮市)
- 歷史的公文書収集
- 歴史的公文書収集 6. 29
- 資料調查 (中2丁目岸本家)
- 古文書等資料デジタルアーカイブ化事業打合せ(市役所)
- 7.7~8 古文書等資料デジタルアーカイブ化事業準備作業
- 7.13 古文書等資料デジタルアーカイブ化事業打合せ(中央公民館) 東部地区文化財担当者会「わがまちの宝物 2」出品資料

デジタルアーカイブ化事業

- 搬入(行田市郷土博物館) 7.14 東部地区文化財担当者会
- 現地見学会 (東京)
- 7. 15 埼史協実務研修会(埼玉 県立文書館)
- 古文書等資料デジタルア
- ーカイブ化事業準備作業 8. 1 民具資料館消防点検
- 古文書等資料デジタルア
- ーカイブ化作業の開始
- 民具資料館除草·清掃作業 8. 4 市教研市内文化財めぐり市内巡見対応
- 教職員1年次・教職員5年次研修受入(民具資料館・資料室)
- 8. 10 教職員5年次研修受入(資料室)
- 15 民具資料館見学(一般·市外)
- 市指定文化財調査(幸宮神
- 社本殿の彫刻 修復関係)
- 第9回市史講座①(市役所)
- 資料閲覧者対応(資料室) 8. 22
- 8. 23 古文書等資料デジタルアー
- カイブ化事業中間検査(神 奈川県川崎市)
- 8. 28 第9回市史講座②(市役所) 民具資料館清掃(教職員研修) 東部地区文化財担当者会「わがまちの宝物2|出品資 料撤収 (行田市郷土博物館)
- 埋蔵文化財打合せ(埼玉県庁)
- 9. 14 東部地区文化財担当者会民俗部会 (宮代町郷土資料館)
- 10. 6 資料受領(神扇)
- 10. 11 埋蔵文化財試掘調査 (千塚柴原遺跡内)
- 10. 12 岸本家文書仮整理終了(資料室)
- 10 17 民旦資料館清掃
- 10. 18 民具資料館見学(香日向小学校)
- 資料受領(中4丁目)
- 10. 25 民具資料館見学(権現堂川小学校)
- 11. 8 資料調査(聖福寺) 11. 11 民具資料館見学(さかえ小学校)
- 11. 15 東部地区文化財担当者会民俗部会(宮代町郷土資料館)
- 11. 18 民具資料館見学(一般)
- 11. 24 民具資料館見学(上高野小学校)
- 東部地区文化財担当者会 (白岡町役場)

- 11. 28 埋蔵文化財試掘調査(内 国府間字順礼)
- 11. 29 古文書等資料デジタルアー カイブ化事業中間検査(神 奈川県川崎市)
- 11. 30 行政資料収集
- 資料閲覧者対応(資料室) 12. 6 資料調査(幸手小学校徳
- 智修開室資料) 資料閲覧者対応(市役所)
- 12. 27 民具資料館年末点検

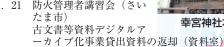
平成24年

- 1. 5 東部地区文化財担当者会 「わがまちの宝物2」展示 作業(宮代町郷土資料館)
- 1.11 資料返却(中2丁目岸本
- 1.13 幸宮神社本殿彫刻修復状 況確認検査(久喜市) 資料閲覧者対応(資料室)
- 古文書等資料デジタルア ーカイブ化事業中間検査 (神奈川県川崎市)



埋蔵文化財試掘調査 (内国府間地内)

- **久喜工業高校インターンシップ受入(資料室)**
- 1.27 久喜市立郷土資料館に資料貸出し(資料室)
- 古文書等資料デジタルアーカイブ化事業システム打合せ(資料室)
- 資料閲覧者対応 (資料室)
- 民具資料館消防点検・展示替え・清掃 民具資料貸出 (権現堂川小学校)
- 江戸川強化堤防関係の埋蔵文化財試掘立会(槙野地)
- 江戸川強化堤防関係の埋蔵文化財試掘立会 (槙野地) 東部地区文化財担当者会民俗部会(宮代町郷土資料館)
- 民具資料の搬出 (権現堂川小学校)
- 2.14 幸宮神社本殿彫刻修復状況確認調査(久喜市) 民具資料館清掃・展示替え
- 2.15 民具資料館見学(八代小学校)
- 幸宮神社本殿彫刻修復完 了に伴う取付工事立会 東部地区文化財担当者会 民俗部会 (県立文書館)
- 2.17 民具資料館見学(吉田小 学校) 民具資料館の展示替え
- 2. 21 防火管理者講習会(さい たま市)





幸宮神社本殿彫刻

- 2. 22 防火管理者講習会(さいたま市) 古文書等資料デジタルアーカイブ化事業システム打合せ 2. 23
- 東部地区文化財担当者会例会(三郷市中央公民館)
- 2. 28 資料閲覧者対応(資料室) 資料閲覧者対応 (資料室)

(神奈川県川崎市)

- 古文書等資料デジタルアーカイブ化事業完了検査(市
- 資料調查 (上高野) 3 9
- 3. 13 資料閲覧者対応 (資料室)
- 3.14 民具資料館の消防設備修繕・展示替え
- 3. 15 資料調査(中3丁目) 資料受領(中4丁目)
- 3.26 文化財保護審議会(市役所第2会議室)

幸手市文化遺産だより第10号

平成25年3月1日発行

- 編 集:幸手市教育委員会 生涯学習課 〒340-0192 幸手市東4-6-8 TEL 0480-43-1111 内線644
- 発 行:幸手市教育委員会



Satte Cultural Heritage



平成25年3月1日

●「地名」という地域固有の文化遺産 幸手市の地名の由来

幸手市の市名の元になっているのは、江戸時代、徳川幕府が整備した五街道のひ とつ日光道中の第6番目の宿場町として栄えた「幸手宿」を直接の由来としていま す。ただし、江戸時代前期(慶安2~3年[1649~1650]頃)に幕府が作成した郷帳 という公的な帳簿の案とされる『武蔵田園簿』では、幸手宿でなく「田宮町」と記 され、その傍らに「薩手とも云う」と記されています。つまり、17世紀中頃までは、 「田宮町」が公的な地名であり、「薩手(幸手)」は準公的な位置づけだったのでしょう。 その後、元禄15年(1702)の元禄郷帳には「幸手町」と記され、この頃から公式に も幸手と呼ばれるようになったことがわかります。

幸手の語源 ところで「幸手(さって)|という地名の意味を考えたことがあり ますか?あらためて眺めてみると珍しい名前ですね。『日本地名総覧』(角川日本地 名大辞典 別巻Ⅱ)という日本全国の地名を一覧できる本がありますが、「幸手」と

いう地名は、この幸手市にしかありません。そういう意味でも、固有の文化遺産であるともいえるでしょう。 さて、この珍しい地名の由来について質問を受けた場合、次の二つの事柄について説明しています。 第1番目が「アイヌ語説」です。知里真志保著『地名アイヌ語小辞典』(北海道出版企画セ

Sat (さッ) →水の涸れている、乾いている

ンター)を見ますと、次のような項目が掲載されています。

Sattek(さッテク)→やせている、が原義。川が夏になって水が涸れて細々と流れている状態

アイヌ語から地名を考える学問は、古くからありました。『角川日本地名大辞典 11 埼玉県』でも、この アイヌ語から幸手の意味を解釈しています。ちなみに、北海道には、江戸時代の地名として、「サツテクオ トケフ(乾いた音更川の意味)」(河東郡音更町)、「サツテクベツ(涸れ川の意味)」(士別市)があったよう です。アイヌ語説から考えれば、その由来は同じで、サッテの仲間といえます。市域には、今は流れていな い河川流路の痕跡がはっきりと土地に刻まれていますが、昔むかしアイヌ語を理解する人びとは、そうした 川の姿をみて「さッテク」と呼んでいたのかもしれませんね。

「薩天ヶ島」説 第2番目が「薩天ヶ島(さってがしま)」説です。これは、『龍燈山伝燈紀』(『鷲宮町史 史料四 中世』所収)という漢文で書かれた記録に見えますが、関連部分の内容を現代語訳すると以下のよ うになります。

景行天皇の皇子の倭建命(日本武尊)が東国下向のおり、武蔵・下総両国に あった幸魂・真間の大入江の島山に上陸して、島の周囲を船で巡りました。一 1 巡した倭建命は「大八洲に似た大島だ」と言います。そこで「大島」と名付け られ、「八島」ともいわれるようになりました。その後「高野」と名付けられた 当地は、古代には「薩天ヶ島」とも呼ばれていました。

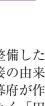
倭建命が活躍した時代のはるか昔、約6,000年前の縄文時代は今より温暖な気候 で、海が関東平野の内陸部まで入り込んでいました。これを「縄文海進」といいます。 その頃、幸手市域の大部分は海の底でしたが、高台にあった槙野地原遺跡で発掘さ れた縄文時代の貝塚からは、カキやハマグリなど海の貝が見つかっています。

「幸手」という地名の由来と、潮騒が聞こえる海の記憶を秘めた大きな入江に浮か ぶ「薩天ヶ島」。このふたつが結び付くのであれば、とても素敵なことですね。

さてさて、今回の文化遺産だよりでは、古くから伝わる市域の地名に焦点をあて、 名前の由来についてご紹介したいと思います。







「地名」という地域固有の文化遺産

古くから続く市域の地名の由来

みなさんがお住まいの土地の名前の由来や意味について考えたことはあります か?今回は身近な地名を地域に伝えられたひとつの文化遺産ととらえ、特に江戸 時代・明治時代から続く古い市域の地名(現在の大字名)をピックアップし、そ の由来について紹介します。

それにあたり、昭和30年代の市町村合併より前にあった旧町村ごとの枠組みを 設け、8 つにグループ分けしましたが、これら旧1町・旧7村は、明治22年(1889) の町村制施行で設置されたものです。あわせて『埼玉県市町村合併史』を参考に 各旧町村の命名経緯を紹介します。

とはいえ、地名の由来の解釈については、地名学上のさまざまな見解や言伝え があり、研究者によっても解釈が異なる場合もあります。そういう意味で紹介し た内容は、地名の由来について、ひとつの見方を示す情報とお考えください。

なお、今回の内容は出典を明記したもの以外については、ことわりの無い限り 『角川日本地名大辞典 11 埼玉県』(発行:角川書店)の記述を参考としています。

みゆき

行幸 村 〔命名経緯〕関係諸村の中で大きな村の名前、 もしくは各村名を折衷しようとしたが、いずれ も協議が成立しなかった。そこで、桜の名勝として有名な行幸堤の 名称をとり「行幸村」と命名した。(なお行幸堤は明治天皇の行幸に由来する。)

[由来]数多くの古墳が存在したことに 由来するという。

由来)谷に臨んだ小平地にあることによる。 [参考]『新編武蔵風土記稿』には、江戸 時代、内国府間村の遠藤氏(幸手一色 氏家臣)が開発したことにちなみ命 名されたとの伝承を載せる。

松石(まついし)

由来]不詳。

[参考『角川日本地名大辞典』別巻 日本 地名総覧でみると、全国の大字レベル では幸手以外には見えない珍しい地名。

高須賀(たかすか)

[由来]川沿いにできた自然堤防の比較 的高い土地を意味する。

参考〕『日本国語大辞典』では、「すか について、川や海の水などで堆積し た砂地や、砂丘を意味すると説明し ている。

、国府間(そとごうま)

由来『コウマ」とは河間の地の意味。 参考〕外国府間と内国府間は元来一村 だったとみられるが、慶安2~3年 頃(1649~1650)の『武蔵田園簿』 では、すでに外・内に分かれている。

ごんげんどうがわ

権現堂川村 [命名経緯]関係諸村の中で大きな村の名前、もしく は各村名を折衷しようとしたが、いずれも協議が成立し なかった。その過程では権現堂堤にちなみ「大堤」案もでたが、紆余曲折の結果、 権現堂堤の名称をとりそのまま「権現堂堤村」と命名することに決定したが、 最終的に県の権限に基づき「権現堂川村」と命名した。

神明内(しんめいうち)

[由来]アイヌ語の「シペ」から生 じたといわれ、川に臨んだ平地 (ウチ)の意味があるという。

〔参考〕アイヌ語の「シペ」は川 の本流を意味する(『地名ア イヌ語小辞典』)。また、「し べうち」ともいい(『新編武 蔵風土記稿』)、志辺内とも 書いた (『幸手市史 古代・ 中世資料編』 282 文書)。

国府間

高須賀

国

一府間

幸 手

上高野

権現堂

円藤内

下川崎

権現堂(ごんげんどう)

[由来]当地に熊野・若宮・白山の三つの権現を合祀した 古い神社があったことにちなむ。

上吉羽 かみよしば)

〔由来〕葦の生い茂った場所にちなむものと推測されて いる。

木立(きだち)

木

立

神 扇

上戶戶島

大島新田

安戸

明

須賀

明治時代後期の幸手の地名

吉羽

天神

島

[由来]地名は地形に由来し、「タチ」とは低地に臨む台地 の端の意味があるという。

和田

下吉羽

平野

中野

和田

惣新田

長

太い線は旧町村の区域を示す

点線は江戸時代の村の境界を示す

細野は大正6年に吉田村に編入

槙野地

細

出

[命名経緯]かつてこの地域が「岡郷」 と言われたことにちなみ、豊年の「豊」

の一字を冠して「豊岡村」と命名した。

西関宿(にしせきやど)

東葛飾郡関宿町大字向河岸と大 字向下河岸が、埼玉県中葛飾郡 豊岡村へ編入するとき合併して 成立。関宿の西にあることにち なむ。なお、関宿とは、関所のあ る津(戸)が転訛したものという。 向河岸(むこうがし)

[由来]江戸時代の江戸川の開削で 関宿と分離、関宿城に近い関宿 内河岸に対して名づけられた。 ・向下河岸(むこうしもがし) (由来)向河岸と同じ。

中島(なかじま)

[由来]明治28年(1895)に千葉県 [由来]言伝えでは河川の乱流により 島状と化した土地にちなむという。

[由来]言伝えでは台地の鼻先の意という。 〔参考〕「はな」は「端」で、物の先端 の部分、はじ、末端のことをいう (『日本国語大辞典』)。

槙野地(まきのじ)

〔由来〕牧場の地に由来するという。 〔参考『下総国郡村誌』では、古くは 「牧之内」と称したとする。

よしだ 吉田 材

〔命名経緯〕各村の名前から一字ずつと り折衷して「吉田村」と命名した。

惣新田(そうしんでん)

賀村・惣新田村が合併し て成立。

・高須賀(たかすか) 〔由来〕行幸村の高須賀と同

[参考]江戸時代には、行幸 地区の高須賀村と区別す るため「惣新田高須賀村」 (由来)上宇和田と同じ。 (『幸手市史 近世資料編

』 181 文書)。 惣新田 (そうしんでん) 〔由来〕開発の歴史にちな む。江戸時代初期に高須 賀村と下宇和田村が親村 となり関宿藩領内の荒地 を開発した。新田地は例 えば「字三田組」と名付け、 惣名を惣新田村と唱える ようになった(『幸手市史 近世資料編 』 181 文

上宇和田(かみうわだ)

明治7年(1874)に、高須 [由来]川の曲流部に臨んだ平地を「ワダ」 ということにちなむ。

[参考]「わだ」は「曲」で、地形の入り曲 がっているところや、入り江などをいい (『日本国語大辞典』)、当地がかつて河 川の曲流部に位置したこと示す。

下宇和田(しもうわだ)

と記載することがあった 〔参考〕上・下宇和田はもと一村であった と伝える。

下吉羽(しもよしば)

[由来] 葦の生い茂った場所にちなむもの

細野(ほその)

[由来]「ほその」の「の」は山の裾野を指し たもので、広野に対する細野と解されて いる。

最終的に 12 の組が成立、[参考]当初は桜井村に所属したが、大正6 年 (1917) に吉田村に編入された。なお 桜井村は、かつてこの地域が「桜井郷」と 呼ばれたことにちなむ。

幸手町

〔命名経緯〕旧幸手宿の名称を踏襲したが、宿は町と改められた。

幸手(さって)

〔由来〕表紙参照。

参考)明治 7年(1874)12月、幸手宿を構成して いた右馬之助町、久喜町、仲町、荒宿、牛村の五 株が合併して新たに幸手宿となる(『幸手市史 通史編 』)。『新編武蔵風土記稿』では、右馬之 助は開発者の新井右馬之助にちなみ命名、久喜 は開発者の知久帯刀が埼玉郡久喜町から移住 したため、または知久の「久」と帯刀の「き」をと って名付けたとする地名由来を載せる。

内国府間(うちごうま)

(由来)外国府間と同じ。

[参考]『新編武蔵風土記稿』では「うちこぶま」と 読んでいる。天正2年(1574)、戦国時代の領主 幸手一色氏の家臣の遠藤石見が土着し開発さ れたとする。また、明治時代に編さんされた『武 蔵国郡村誌』では、古くは内記新田・国府間・長 戸呂の3村で内国府間と称したとする。

八代村

[命名経緯]関係諸村の中で大きな村の名前、もしくは各村名を折衷しようとしたが、いずれも協議が成立しなかった。そこ で、このあたりが通称「八代耕地」といわれていたことからその名称をとり「八代村」と命名した。

平野(ひらの)

[由来]平坦地を意味する。

[参考]『日本国語大辞典』では、平坦な野原を意味 するという。なお、鎌倉時代の建治元年 (1275) の金沢実時譲状に「平野村」と記されているが、 市域の地名が古文書の中に具体的にみられる最 初の事例が、この平野村である(『幸手市史 古代・ 中世資料編』 152 文書)。

長間(ながま)

の湖沼の意と理解され、川の川荒 の沼地に由来する地名と伝える。 [参考]アイヌ語の「マ」は「澗」(『地 名アイヌ語小辞典』)、「澗」とは、 谷、谷水、山あいの川の意味があ る(『角川新字源』)。

平須賀(ひらすか)

し、河洲の平らな土地を 意味する。

〔参考〕「すか」の意味につい ては、行幸村の高須賀も 〔由来〕不詳。 参照。

書)。

中野(なかの)

[由来]「ながま」の「ま」はアイヌ語 [由来] すか (洲処)を意味 [由来] 平地の意味。下野や上野に対し称せられたと 伝える。

吉野(よしの)

[参考]葦の生い茂った場所にちなむものか、あるい は、良いという意味の「吉」か、いずれにしても不詳。

神扇(かみおうぎ)

[由来] 戦国時代の幸手の領主―色宮内少輔が応永 33年(1426) に勧請したと伝える天 神社のご神体が、扇子を持っていたことにちなむという(『幸手市史 近世資料編』 184 文書)。

天神島(てんじんしま)

[由来]池に浮かぶ島に天神社が勧請されていたことに由来するという。

[参考] 天神島菅神廟縁起」という記録には、古代にあった平須賀沼・倉松沼・轡瀬沼のう ち轡瀬沼に浮かぶ島を轡瀬島といい、延長元年(923)菅神霊をここに初めて祀ったこ とから天神島と称したとする伝承を紹介している(『幸手市史調査報告第9集 幸手一 色氏』)。

さくらだ

桜田村 〔命名経緯〕最初は八輪野 崎村。その後、桜田に改称。 その由来は、かつてこの地域が「桜井郷田宮荘」 であったことにちなむ (『角川日本地名大辞典』)。

中川崎(なかかわさき)

[由来]川崎は、川に突きでた川の先の所を意味する。 [参考]慶安2~3年頃(1649~1650)の『武蔵田園簿』 では、「三川崎」とあり、古くは上川崎・中川崎・下川崎 は一つの村だったが、17世紀末~18世紀初頭の元禄 期には村が分かれ、中川崎村が成立している。

下川崎(しもかわさき)

[由来]中川崎と同じ。

かみたかの

上高野村がそのまま存続した (『角川日本地名大辞典』)。

上高野(かみたかの

[由来]『日本国語大辞典』では、高野と は、周囲の平地より高い平野をいう。 また、「野」とは、山に対するもので、 平らな土地をいう

参考]古くは上高野・下高野(杉戸 町)は1つの村であったという (『武蔵国郡村誌』)。

江戸時代の

戸島(としま) 明治10年(1877)に安戸村・上戸村・大島新田が合併して成立。村名は各村名 からそれぞれ1字をとって命名した。

・安戸(やすと) 〔由来〕沼地(ヤス)のある処(ド)の意という。 ・上戸(かみと)

[由来]不詳。

〔参考〕「戸」は、河口や海などの両岸が狭くなっている所や水流が出入りする所、ま たは水が流れている所などを意味する(『日本国語大辞典』)。

・大島新田(おおしましんでん)

[由来]江戸時代の享保8年(1723)に安戸沼を開発した新田村で、江戸柳橋の商人 で開発者の大島清兵衛の姓をとって村名とした。

各大字の読み方は『日本行政区画便覧』に拠りました。